

翻刻 西村天囚著『懷德堂考之一』（その五）——含翠堂調査の記録——

竹田 健 二

要旨 本稿は、西村時彦（号は天囚・碩園）の故郷である種子島・西之表市の西村家に所蔵されていた西村天囚関係資料の一つ『懷德堂考之一』（抄本、一冊）の後半部に記されているところの、含翠堂に関する調査記録の部分の翻刻である。この調査記録は、天囚が明治四十三年（一九一〇）一月二十九日に開催された大阪人文会第二次例会において講演を行った五日後の二月三日に、含翠堂があった平野郷町に自ら赴いて調査を行い、大阪朝日新聞社に返って記した部分が中心となっている。同年二月七日より天囚が大阪朝日新聞紙上で開始した連載「懷德堂研究其一」（完結時に『懷德堂考』上巻と改題）の中の第六回（二月十三日付）に掲載された「石庵と含翠堂」の節は、この時の調査によって得られた知見を踏まえて記述されている。含翠堂調査の記録は、懷德堂顕彰運動の起点となった天囚の懷德堂研究の実態を解明する上で、重要な手がかりとなる。

【キーワード】 西村天囚、「懷德堂研究其一」、「懷德堂考」上巻、含翠堂

【解題】

明治四十三年（一九一〇）一月二十九日、西村時彦（号は天囚、碩園。以下、天囚）は大阪府立図書館で開催された大阪人文会第二次例会において五井蘭洲について講演を行い、続いてその九日後の二月七日から同月二十七日まで、大阪朝日新聞紙上において「懷德堂研究其一」の連載（合計二十回）を行った（完結時に『懷德堂考』上巻と改題。以下、連載『懷德堂考』上巻）。この時期の天囚の懷德堂に関する研究は、その後大きく展開することとなる懷德堂顕彰運動を支えるものとなった。もともと、天囚がどのように懷德堂研究に取り組んだのかについては、従来ほとんど注目されていなかった。

天囚が懷德堂研究に取り組んだ際に用いた資料については、拙稿「西村天囚の五井蘭洲研究と『懷德堂記録』（『懷德堂研究』第七号、二〇一六年）、及び「西村天囚の五井蘭洲研究と関係資料——『蘭洲遺稿』・『鶏肋篇』・『浪華名家碑文集』について——」（『懷德』第八十五号、二〇一七年）において検討したが、二〇一七年に開始した天囚の故郷・種子島の西村家に所蔵されていた西村天囚関係資料の調査により、天囚が連載『懷德堂考』上巻を執筆するまでに取り組んでいた懷德堂の研究の実態について、詳細に把握することのできる貴重な資料が発見された。それが『懷德堂考之一』（抄本、一冊）である（注1）。

『懷德堂考之一』の前半部分（第一葉表～第四十九葉表）は、天囚自身が大阪人文会第二次例会での講演の中で「未成品でございませうけれども、取調べました草稿が約

五十枚——漢文で書いたのが五十枚ございます」と述べている、この時の講演の原稿となった「草稿」である（注2）。『懷德堂考之一』の後半部分（第五十葉表～第九十九葉裏）は、大阪人文会において講演を行った後、天囚が追加して蒐集した資料や調査の記録等を記した部分である。この後半部分の中に、明治四十三年（一九一〇）二月三日、すなわち大阪人文会第二次例会の五日後、連載『懷德堂考』上巻が開始される四日前に、天囚が平野郷に赴いて行った含翠堂に関する調査の記録（第五十九葉表～第六十四葉表）がある。

『懷德堂考之一』後半部の含翠堂調査記録は、その内容から以下のように区分される。

- ① 多治見（注3）久太郎宅を訪問して行われた、多治見家所蔵資料の実見。
- ② 平野小学校を訪問して行われた、含翠堂旧蔵書の実見（『十三経』・『大学述古』・『数祓講述鈔』・『三元集』・『牘記』）。
- ③ 平野郷の「七名家」の説明。
- ④ 光源寺における篠原盤谷の墓の調査、及び土橋家・末吉家の墓が服部川の神光寺にあることの説明。
- ⑤ ①～④を二月三日に編集局において執筆したことを示す識語。
- ⑥ 天囚の所見。
- ⑦ 『摂津名所図絵』から、含翠堂に関する記述の引用。

天因は①～⑤の部分を、二月三日の当日午後、平野郷から大阪に戻って「編輯局」、すなわち大阪朝日新聞社において執筆した。⑥の天因の所見と⑦の『摂津名所図会』からの引用とを、天因がいつ記述したのかは不明だが、⑥の部分の先頭は、⑤の部分（一行のみ）の次の行から、空白の行を挟むことなく連続して記されており、また⑦の部分も同様に⑥の部分と連続して記されている。このため、⑥・⑦の部分はおそらく二月三日の直後に記されたと推測される。

この記録によって天因が平野小学校において含翠堂の旧蔵書を実見していたことを知った筆者は、天因の実見した含翠堂の旧蔵書が現存するかどうかを確認したいと思い、手がかりを求めて二〇二二年七月に大阪市立平野図書館を訪問し、荒木麻里館長（現・天王寺図書館）に相談した。後日荒木氏から、平野歴史民俗研究会の南田潤氏からの情報として、含翠堂の旧蔵書は杭全神社に現存するとの情報をお知らせいただいた。直ちに杭全神社の藤江寛司禰宜に調査を申し入れたところ、快諾を得た。そこで同年八月八日と九月十四日、天因が実見した『十三経』についての調査を行い、その成果を「西村天因と含翠堂」（『懷德』第九十一号、二〇二三年）に発表した（注4）。「西村天因と含翠堂」で述べたように、『懷德堂考』上巻の連載第六回（二月十三日掲載）の「石菴と含翠堂」の節で天因は、含翠堂について説明をしているのだが、大阪人文会第二次例会での講演においては含翠堂についてまったく触れておらず、講演の原稿となった『懷德堂考之一』の前半部においてもやはり含翠堂に関する言及は存在しない。このため、『懷德堂考之一』の前半部を執筆し終えた時点、そしてその草稿をもとに大阪人文会第二次例会において講演を行った時点で天因は、含翠堂について何も知らなかったか、その存在については知っていたとしても、懷德堂と含翠堂とが深い関係にあったことを理解しておらず、ほとんど注目していなかったと推測される。以下は憶測に止まるが、講演において含翠堂に言及しなかった天因に対して、聴衆の中の誰かが、平野郷の含翠堂は懷德堂よりも早く享保二年（一七一七）に設立されており、懷德堂の初代学主・三宅石菴が含翠堂で講義を行っていたことなどを教示し、そのために天因は含翠堂についての調査が必要と判断し、平野郷町に赴いたのではないかと推測される（注5）。

「石庵と含翠堂」の節の全文は以下の通りである。

享保度の大火には、石菴も盡く蔵書を焚き、難を平野に避け、るが、平野の諸同志力を合せて慰藉せしとなり、平野の諸同志とは含翠堂の同學を云ふ。

含翠堂は平野の郷學なり、東厓の文集に記あり、攝津名所圖繪に圖あり、抑此の平野は、平野千軒と稱ふる巨邑にして、初は本多侯後には土井侯の所領なるが、土豪に七名家と稱するあり、土橋末吉三上の諸氏をいふ、土橋公諒（名友直、公諒は字、號は誠齋か、稱七郎兵衛）、末吉止齋（名宗伴、字德安）、土橋節齋（名

宗信）等は、其の翹楚なり、是より先き或は京師に游學し、或は師儒を禮聘して、道を問ひ學を講ずる者日久しかりしが、最も仁齋を尊信して其の學風を奉じたりき、土橋公諒慨然として同志と謀り、井上佐兵衛正臣が居室を割きて講堂を建て、庭に一古松ありしより含翠堂とは名けつ、三十七十の日を以て會日と爲し、伊藤東厓、三輪執齋、及び石菴を聘して講を聴けり、東厓が節齋の招きに應じて平野に遊びしは、享保十二年丁未に在り、河内の八尾にも環山樓（文集には環翠樓に作れり）といふ學堂ありて、東厓は環山含翠を巡講しきといふ、環山樓記は享保十四年己酉に成りて、含翠樓記は同じく十七年壬子に成れり、然れど學堂の始は固り丁未以前にして、享保九年大火の前より、平野に近き浪華の石菴は屢其請に應じけん、斯る緣故よりして石菴蘭洲等も火を此に避けしなるべし、かはらぬ松の色とこしなへに朽ちずして聖教を學び、呉竹の世々に傳へたりし含翠堂の古松は、維新の廢學と共に伐り棄てたりと聞くはいと惜しけれど、堂内舊藏の典籍は、今も什の一を小學校内に收藏せり、中に末吉止齋の著はせる大學述古一冊あり、土橋節齋寛保元年の跋、及び足代立溪同二年の跋あり、立溪名は弘道、伊勢の人、『予寓于庠中有年』と見えれば、此人聘に應じて學堂の教授たりけん、學堂の舊藏に伊勢の神書多きは、立溪の遺篋なるべく、彼の平野郷より出で、幕府に仕へ、任官して長崎奉行にまで累進せし末吉撰津守利隆（末吉五郎兵衛綱利の子）^{（一）}は立溪の門に出でたり、長崎の任滿ちて東歸の途すがら、彼地にて購ひし十三經一部十六套を含翠堂に寄附したりし者、今猶儼存し、函蓋には攝津守及び篠原盤谷の識語あり、盤谷名は弼、寛政中學堂教授たりし人なり、墓は光源寺に在れど、碑文なければ其の來歴を詳にせず、要するに郷學含翠堂は、享保中の創立にして、其の起源は府庠懷德堂よりも古きかと思はれ、絃誦の聲、長に松嶺と和して、往々人材を出し、は、諸國の郷學中に罕比なる者ならん。

懷德堂の濫觴は、享保大火の年に在り、蓋し石菴の門人等、此の時石菴を平野に訪ふて、含翠堂の規模を一覽し、激勵咸奮する所ありしにあらざるか。

この節において天因は、『大學述古』の土橋節齋の序文（注6）、足代立溪の跋文、『十三経』の箱蓋に記された末吉利隆の識語、光源寺の篠原盤谷の墓などについて述べているが、そうした記述が『懷德堂考之一』後半部分の含翠堂調査記録を踏まえたものであることは確実である。

天因に含翠堂のことを教えた人物は不明だが、その可能性のある人物としては、先づ天因が平野郷に赴いた際に最初に訪問した多治見久太郎が考えられよう。多治見家については、大阪府東成郡役所編『東成郡誌』（大正十一年「一九二二」）。名著出版が昭和四十七年「一九七二」に復刻）第十五編平野郷町第七章に「旧家」として取り上げられて、その家宝が紹介されている。その中には天因が多治見家で実見した伊藤東

涯筆の「環山樓額」と「環山樓記」、及び篠原盤谷に贈られた米山人筆の「含翠堂之図」が含まれている。もっとも、多治見と天囚との詳しい関係等は不明である。

多治見の他に、天囚の調査に同行して平野郷に赴いた久松定憲(号は澱江)と河田為作(号は南莊)も含翠堂に関する情報提供者であった可能性が考えられる。『懷徳堂考之一』の含翠堂調査記録においては、平野郷に同行した人物を「久松川田二君」と天囚は述べており、「久松」は、大阪朝日新聞社に勤め、また浪花文学会や大阪人文会の会員として天囚と長く関わっていた久松定憲(号は澱江)と考えられる。但し、久松と平野との関係については未詳である。

問題は「川田」なる人物である。明治四十三年十一月印刷の「大阪人文会員名簿」には「川田」姓の人物は記載されていない。但し、河田為作という人物が号は南莊、職業は新聞社員と記載されている。天囚の連載『懷徳堂考』上巻は、翌月の三月六日に連載時の紙型を用いて印刷した小冊子(非売品)が三十五部単行されたが、その末尾に、幹事が「河田南莊」であったと記されていることから、河田為作は天囚・久松と同じく大阪朝日新聞社の社員であったと考えられる。天囚が含翠堂調査記録において多治見久太郎の姓を「田治見」と誤記していることからすると、『懷徳堂考之一』に「川田」と記された同行者は河田為作だったのではないかと推測される(注7)。

このことを傍証すると思われるのが、単行された『懷徳堂考』上巻の巻末に附した識語である。

此の稿を草するに當りて、濱眞砂、太田蘆隱の二君、及び社友木崎尚君は、其の所藏の資料を提示し、河田南莊、中尾柳處の二君は、含翠堂及び富永伸基の事蹟搜訪の爲に、平野池田等に往來して、好資料を提供せられたり、此に感謝の意を表す。

明治庚戌二月

編者識

「此の稿を草するに當りて」とあることから、この識語を記した「編者」が天囚自身であることは確実である(注8)。この識語の中で天囚が、濱・大田・木崎に続いて「河田南莊、中尾柳處の二君は、含翠堂及び富永伸基の事蹟搜訪の爲に、平野池田等に往來して、好資料を提供せられたり」と述べていることは、天囚の平野郷での調査に同行したと考えられる河田が、天囚に含翠堂に関する情報を提供したことを意味している可能性があると考えられる。もっとも、「河田南莊、中尾柳處の二君」の貢献は、含翠堂についてだけではなく、「富永伸基の事蹟搜訪」のために「池田等に往來したことも含まれており、二人がそれぞれ天囚の研究にどのように貢献したのかは明確ではない点に留意が必要であり、また河田と平野との関係は未詳である(注9)。

なお、天囚の含翠堂調査記録においては、「多治見」が「田治見」と誤記されており、

「川田」も「河田」の誤記であったと考えられるが、他にも問題のある記述が存在する。例えば、天囚は含翠堂旧蔵『十三經』の箱書きや、『大学述古』等の序文や奥書等を書写しているが、その中には誤字脱字等が複数箇所認められる。また、含翠堂創設の中心人物である土橋友直(誠斎)と、「含翠堂記」や『大学述古』の序文を記した土橋宗信(節斎)との関係について、①の部分の頭注において二人は「族人」、つまり遠い同族の者と記しているが、②の部分の中では二人の関係について「誠斎之与節斎、執父執子。亦未知其詳」(孰れか父にして孰れか子なるかも、亦た未だ其の詳らかなるを知らず)と述べ、未詳とはしながらも「誠斎或是節斎之父」(誠斎或は是れ節斎の父)と二人は誠斎が父、節斎が子ではないかとも推測している。後述する通り、友直は土橋家の本家、宗信は分家であり、二人は父子ではない。

更に、天囚は連載『懷徳堂考』上巻において土橋友直の字を「公諒」としているが、管見の限り、土橋友直の字が「公諒」であったことを示す資料は確認できない。天囚は含翠堂調査記録の①の部分の頭注に、伊藤東涯の文集『紹述先生文集』に収録されている「友直字公諒説」との文の題名を墨筆で、またこの文の成立時期である「丙午之夏」との語とを朱筆で記している。このため、天囚が土橋友直の字を「公諒」と判断した根拠は、おそらくこの文の題名であったと考えられる。ところが、後述する通り、東涯の「友直字公諒説」は、東涯が「岡島生」なる人物の求めに応じて、「友直」という名と「公諒」という字とを与えたことを記した文で、土橋友直とは関係がなく、天囚が土橋友直の字を「公諒」としたのは誤りと考えられる(注10)。加えて、④の部分において天囚は、末吉家の墓地について「在服部川神光寺(服部川神光寺に在り)」と述べているが、後述する通りこの情報は事実と異なる。

以上のように、天囚の含翠堂調査記録やそれに基づく連載『懷徳堂考』上巻にはいくつか問題点が認められる。天囚が大阪人文会第二次例会の講演までに執筆していた『懷徳堂考之一』前半部において、天囚は記述の根拠として踏まえた資料について個々に明示して引用しており、実証的な研究を行っていたことが看取できた(注11)。これに対して『懷徳堂考之二』後半部に記された含翠堂調査の記録と、その調査記録を踏まえた連載『懷徳堂考』上巻の記述とについて、こうした誤りが認められる点はいささか意外に思われる。

誤りを生ずることとなつてしまつた要因としては、含翠堂に関係する資料等を広く蒐集し、それらを十分に吟味するだけの時間的余裕が天囚には無かつたことが考えられる。調査は連載『懷徳堂考』上巻の開始直前に急遽行われ、しかも当時含翠堂に関する資料を多数所有していたであろう土橋家や末吉家を訪問することもなかつた。大阪から日帰りでの調査そのものに、そもそも限界があつたことは否めまい。

また、おそらくは天囚が一月二十九日に大阪人文会で講演を行った時点で、翌二月中に大阪朝日新聞紙において、二十回の連載『懷徳堂考』上巻が掲載されることが決

定済みであり、しかもこの年の四月から六月にかけて行われる朝日新聞社主催の第二回「世界一周会」に、天因が参加することも決まっていたと推測される（注12）。そうした日程の都合から、含翠堂に関するより徹底した調査を実施し、かつ蒐集した資料を十分吟味することは、連載開始を遅らせてしまいかねないため、天因にはできなかったと推測される。

もともと、厳しい時間的制約の中であつたとしても、天因自らが平野郷に赴いて調査を実施したこと、そしてその成果を踏まえて連載『懷德堂考』上巻第六回「石庵と含翠堂」を執筆し、その中で「郷學含翠堂は、享保中の創立にして、其の起源は府庫懷德堂よりも古きかと思はれ」と述べ、含翠堂と懷德堂との関係の深さを指摘したことは、これが天因の創見だったわけではないとしても、近世大坂とその周辺に長きにわたって存在した二つの郷校とその学問について考える上で、非常に大きな意義があつたと考えられる。今日、懷德堂よりも早く創設された含翠堂が町人の出資により設立・運営された「学校」として、懷德堂のいわばモデルとなつたことは広く認識され、定説となつている。連載『懷德堂考』上巻の記述は、含翠堂と懷德堂とに関するこの認識が定着する上で大きな契機となつたと理解してよいと考えられる。

注

- 1 『懷德堂考之一』については、修復を行う前の時点での知見については拙稿「研究ノート…西村天因の懷德堂研究とその草稿―種子島西村家所蔵西村天因関係資料調査より―」（『懷德堂研究』第十号、二〇一九年）参照。また、修復後、前半部分を翻刻した拙稿「翻刻 西村天因著『懷德堂考之一』（その一）」（『島根大学教育学部紀要』第五十五卷、二〇二二年二月）、「翻刻 西村天因著『懷德堂考之一』（その二）」（同第五十六卷、二〇二三年二月）、「翻刻 西村天因著『懷德堂考之一』（その三）」（同第五十七卷、二〇二四年二月）、「翻刻 西村天因著『懷德堂考之一』（その四）」（同第五十八卷、二〇二五年一月）、並びに「西村天因の懷德堂研究と『懷德堂考之一』（『懷德堂研究』第十六号、二〇二五年）参照。
- 2 拙稿「資料紹介 西村天因『五井蘭洲』（大阪人文会第二次例会講演速記録）」（『国語教育論叢』第十八号、二〇〇九年）参照。
- 3 後述するように、天因は「田治見」と記しているが、「多治見」の誤りである。
- 4 杭全神社に所蔵されている含翠堂旧蔵書の調査は、その後も継続して行つた。その成果は別稿において発表する予定である。
- 5 天因が講演を行った大阪人文会第二次例会に関して、明治四十三年（一九一〇）一月三十日付の大阪朝日新聞に「蘭洲と鐘成の昨日の大阪人文会」との見出しの記事が掲載されている。その記事に「當日は關係圖書の陳列も多く續々入會の申込者

もあり京都よりは島帝大圖書館長も來會し出席者約三十名に上り非常の盛況」であつたとあることから、この例会の出席者には、その時点で大阪人文会に未入会の人物もいたと見られる。

- 6 天因は「土橋節齋寛保元年の跋」と述べているが、土橋宗信（節齋）が寛保元年（干支は辛酉）に著したのは跋文ではなく序文である。「懷德堂考之一」においてはその序文がすべて「序」として引用されていることから、連載『懷德堂考』上巻執筆時に天因が誤つたと推測される。なお、大正十四年（一九二五）に再刊された『懷德堂考』においてもこの誤りは修正されていない。

- 7 この推測については、拙稿「西村天因の懷德堂研究と『拙古先生筆記』（『懷德堂研究』第十三号、二〇二二年）の注（8）において既に述べた。

- 8 「濱真砂、太田蘆隱の二君、及び社友木崎好尚君は、其の所蔵の資料を提示し」と述べられているのは、大阪人文会の会員である濱真砂（真砂は号。名は和助）が五井蘭洲の『鶏肋篇』を、同じく大阪人文会の会員の大田蘆隱（蘆隱は号。名は源之助）が『蘭洲遺稿』・『懷德堂記録』・『浪華名家碑文集』を、それぞれ天因に提供したことを指す。このことは『懷德堂考』上巻冒頭の「序説」にも明記されている。木崎好尚については、『懷德堂考』上巻の「序説」では木崎が資料の「採訪に協戮」したとのみ述べられているが、『懷德堂考之一』冒頭の「叙論」には、『蘭洲遺稿』を大田から借用して読んだ木崎が天因に対して「世間不易獲之洪宝也」（世間獲易からざるの洪宝なり）と語つたことから、天因は『蘭洲遺稿』を木崎から又借りして読んだとある。前掲拙稿「翻刻 西村天因著『懷德堂考之一』（その一）」参照。なお、二〇一六年度に一般財団法人懷德堂記念会が購入し、その後大阪大学に寄託されて懷德堂文庫に収蔵された資料の一つである『書籍貸借録』は、大田源之助旧蔵の資料と見られ、大田の行つていた書籍の貸し出しについて記載されている。その中に、明治四十三年（一九一〇）一月十五日に大田が『蘭洲遺稿』を木崎愛吉に貸し出し、それが後日天因に又貸しされたことを示すと思われる「西村氏ニ移ス」との朱筆の書込が認められる。この貸与が『懷德堂考之一』の叙論において天因がいうところの又貸しに該当すると考えられる。拙稿「懷德堂文庫新収資料中の太田源之助旧蔵資料」（『懷德堂研究』第八号、二〇一七年、後に『懷德堂研究 第二集』『汲古書院、二〇一八年』に収録）参照。
- 9 中尾柳處について、「大阪人文会員名簿」には中尾姓の人物が二人記されているが、いずれもその号は「柳處」ではない。一人は中尾謙吉（号は東竹、職業は図書館司書、住所は北区）、一人は中尾清太郎（号は繼瀬、職業は会社員、住所は東区）である。二人のいずれかの別号が「柳處」であつた可能性もあるが、未詳である。

- 10 『懷德堂考之一』後半部分の記述、及びそれを踏まえた『懷德堂考』上巻の記述に関しては、含翠堂調査記録以外の他の部分についても問題がある箇所がある。

すなわち、『懷徳堂考之一』後半部分の第六十五葉、第六十七葉には、奥田元継の談話の聞き書きである『拙古先生筆記』からの抄出が記されている。その中に、片山北海（通称は忠蔵）の詩と龍艸廬（龍草廬。通称は衛門）の詩とに関する記述があるが、天囚は「忠蔵」が中井整菴の通称でもあったことから、片山北海に関する記述を整菴に関しての記述と誤解し、連載『懷徳堂考』上巻において、整菴の詩について、「奥田拙古其詩を評して、龍艸廬の及ぶ所にあらずと云へり」と述べている。拙稿「西村天囚の懷徳堂研究と『拙古先生筆記』」（『懷徳堂研究』第十三号、二〇二二年）参照。

11 拙稿「西村天囚の懷徳堂研究と『懷徳堂考之一』」（『懷徳堂研究』第十六号、二〇二五年）参照。

12 天囚が参加した第二回世界一周会については、湯浅邦弘『世界は縮まりー西村天囚『欧米遊覧記』を読む』（KADOKAWA、二〇二二年）参照。天囚が神戸港を出発したのは四月二日、敦賀港に帰着したのは七月十八日である。

【凡例】

・『懷徳堂考之一』後半部分の中、含翠堂に関する調査の記録（第五十九葉表、第六十四葉表）について、便宜的に解題に示した①～⑦に区分して見出しを付け、翻刻を示す。なお、漢文で記されている部分は、翻刻者の書き下し文を附す。

・本文等には、墨筆・朱筆の修正が加えられている部分があるが、翻刻では基本的に、修正後の本文を示す。

・鼈頭に記された注記については、それらが附されていると考えられる本文の該当箇所「注〇」（〇は区分ごとの通し番号の漢数字）を挿入し、本文の後にまとめて示す。

・翻刻者が必要と判断した箇所に補注を附す。補注を附した箇所には、本文中に「補〇」（〇は区分ごとの通し番号のアラビア数字）を挿入する。

・各葉の表・裏の冒頭箇所は、葉数を表す二桁の数字と、「表」「裏」とを【】内に記して示す。

・本文に傍点が付されている箇所については、傍線を附して示す。

・本文中において提行され、その行が以下留白とされている箇所については、翻刻においても提行し、あわせて「／」を附す。

・釈読できない字については、その不明字を「■」で示す。その不明字が概ね推測できる場合は、翻刻者の推測した字を、直後の「」内に入れて示す。推測が不確実である場合は、推測した字の下に「？」を附す。

・漢字については、基本的に通行の字体を用いる。

・脱字が存在すると考えられる箇所（句点を含む）については、その箇所に「」

を附して補う。また、誤字と考えられる文字については、翻刻の原文においてはその文字の右に「(ママ)」と附し、翻刻者の修正した文字を直後の（）内に入れて示す。衍字と考えられる文字については、その文字の右に「(ママ)」と附し、補注を附す。なお、これら脱字・誤字・衍字のある箇所の書き下し文は、いずれも翻刻者の修正に基づく。

【翻刻】

①多治見家訪問

【59表】平野郷有田^(マ)（多）治見^(マ)「補1」久太郎者。号春谷。其父春畝。祖父春塘。曾祖父了慶。並好文雅。庚戌二月初三。与久松川^(マ)（河）田^(マ)「補2」二君往訪。春谷歆待。出示所藏希品「注一」「注二」「注三」。

一 含翠堂圖 岡田米山人所贈于篠原盤谷／

一 東厓^(マ)（涯）「補3」丁未游平野偶賦詩一幅／

一 環山樓記 一卷 享保己酉／

一 同題額 一幅 庚戌／

一 同記文本刻額 一面 庚戌／

又觀賴山陽遺愛盆石紫舟。長約五寸。高不超二寸。誠奇品也。春谷持贈夢華園印譜一冊「補4」。

注

一：含翠堂者■「土」橋友直所創立友直称七郎■「兵」衛節齋其族■「人」也

二：友直学于京師者三年与井上佐兵衛正臣謀割其居宅為講堂每月三五七十之日為講習

迎浪華三宅万年「補5」

三：友直字公諒説／丙午之夏「補6」

【書き下し文】

平野郷に多治見久太郎なる者有り。号は春谷、其の父は春畝、祖父は春塘、曾祖父は了慶なり。並び文雅を好む。庚戌二月初三、久松・河田二君と往訪す。春谷歆待して、藏する所の希品を出示す。

一 含翠堂圖 岡田米山人の篠原盤谷に贈る所なり。

一 東涯丁未平野に遊ぶ偶賦詩一幅

一 環山樓記 一卷 享保己酉

一 同題額 一幅 庚戌

一 同記文本刻額 一面 庚戌

又た頼山陽遺愛の盆石「紫舟」を観る。長さ約五寸、高さ二寸を超えず。誠に奇品なり。春谷『夢華園印譜』一冊を持贈す。

注

- 一…含翠堂は土橋友直創立する所なり。友直七郎兵衛と称す。節齋は其の族人ならん。
- 二…友直 京師に学ぶ者三年、井上佐兵衛正臣と謀り、其の居宅を割きて講堂と為し、毎月三・五・七・十の日もて講習を為し、浪華の三宅万年を迎ふ。
- 三…「友直字は公諒の説」丙午の夏。

補注

- 1…「田治見」は「多治見」の誤り。【解題】参照。
- 2…「川田」は「河田」の誤りと見られる【解題】参照。
- 3…「東厓」とあるのは伊藤東涯のこと。『紹述先生文集』卷三十には、「歳丁未遊撰州平野四首」（歳は丁未 撰州の平野に遊ぶ 四首）が収められており、天因が見た「二幅」にはその詩が記されていたと思われる。
- 4…「夢華園印譜」一冊とは、『定武樓印壘』（多治見久太郎編、明治四十二年）一卷を指す。『定武樓印壘』は、久太郎（号は春谷・夢華園）の所蔵するところの、北山七僧（一七二一―一八〇六）が所持していた印章の印譜集。その序文は藤澤南岳が書いた。吾妻重二「藤澤南岳と篆刻芸術」（『東アジア文化交渉研究』第六巻、二〇一三年）参照。なお、平野郷の多治見夢華園の所蔵品が、「尾陽渡邊翠園」の所蔵品と共に入札が行われた際に作成された目録が現存するが、目録に記載されたものの中に、天因が多治見家で実見した資料は含まれていない。その目録によれば、入札は大阪美術倶楽部において行われ、札元は山中吉郎兵衛、柳川善左衛門、林新助、山田甚助であった。入札日について目録には四月六日としか印刷されていないが、裏表紙にはおそらく目録の所蔵者（表紙の印記から大阪市東区伏見町の「佐藤淺造」と見られる）が記した「大正六年四月」との打ち付け書きがあり、また都守淳夫・中村節子「研究資料 全国売立目録所在一覧」（東京国立文化財研究所・東京国立博物館・東京藝術大学所蔵目録編（一））（『美術研究』三六〇号、一九九四年）にはこの目録は大正六年（一九一七）四月の発行と記載されている。
- 5…この注記は、『撰津名所図会』における含翠堂についての記述を省略したものと考えられる。後述の⑦『撰津名所図会』からの引用参照。
- 6…この注記は『紹述先生文集』巻九に収録されている伊藤東涯の文の題名と、その

文が書かれた時期を示す語と考えられ、「丙午」の年は享保十一年（一七二六）である。もともと、東涯のこの文は土橋友直について述べたものではなく、「岡島生」なる人物が東涯に「丐名」（名を丐ふこと）し、応じた東涯が書いたものである。すなわち、東涯は『論語』季氏篇に「孔子曰、益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。」（孔子曰はく、「益者三友、損者三友。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは、損なり」と。）とあり、またその朱熹の注に「友直則聞其過、友諒則進于誠。」（直を友とすれば則ち其の過ちを聞き、諒を友とすれば則ち誠に進む。）とあることを踏まえ、岡島の名を友直、字を公諒とした。おそらく天因は、題名に「友直字公諒」とあることから、文の中身を読まずに土橋友直について述べた文と誤解して、土橋友直の字を「公諒」と見なしたと考えられ、『懷徳堂考』上巻においても「土橋公諒（名友直、公諒は字、號は誠齋か、稱七郎兵衛）」と述べている。また『懷徳堂考』が大正十四年（一九二五）に再刊された際にもこの記述は修正されていない。梅溪昇・脇田修編『平野含翠堂史料』（清文堂出版、一九七三年）所収の三輪執斎が記した「送土橋丈婦南撰序」（土橋丈の南撰に帰るを送るの序）は、「元禄癸未」の年、つまり元禄十六年（一七〇三）に記載されたもののだが、その中で執斎は「友人土橋友直」と呼んでおり、土橋友直の名「友直」が享保十一年（一七二六）の「丙午」の年に東涯によって名付けられたものでないことは明らかである。加えて、土橋友直の没年には諸説あるが、『含翠堂（土橋）文庫目録』（大阪大学附属図書館、一九七二年）にM76として記載されている「土橋、三上、三宅氏過去帳」には「享保拾貳末年十月二日」と記されており、また土橋宗信が享保十五年（一七三〇）に記した「含翠堂記」（梅溪昇・脇田修編著『平野含翠堂史料』（清文堂、一九七三年）所収）には「友直不幸にして未の十月世をはやうせり」とある。このため、土橋友直は享保十二年（一七二七）の丁未の年に没したと理解するのが妥当と思われる。とすれば、土橋友直が没する前年に東涯によって「友直」と名付けられ、「公諒」の字を与えられたとは考え難い。「土橋、三上、三宅氏過去帳」については、平野歴史民俗研究会の南田潤氏に御教示いただいた。厚く御礼申し上げます。

②平野小学校訪問

【59表】去訪平野小学校【補1】。観含翠堂旧蔵書籍【補2】。都壹百拾餘部。蓋是什之一。其餘維新之際散乱云。一函【59裏】蓋有文云【補3】。／

十三経一部十六套。永附于攝之平野郷含翠堂。蓋平野予之桑梓也。予幼時屢游郷校。受学足代立溪先生【補4】。長游東都。累官長崎。監居一年。任満還東都。實天明

戊辰八年也。購書若干種。是書云（亦）〔補5〕其所得云。末吉攝津守藤原利隆〔補6〕／

十三經一部。為末吉藤公之所賜以「永」〔補7〕附于平野鄉含翠堂。先是公嘗承命。襄帷長崎〔注一〕。長崎者海船所輻湊。〔公〕〔補8〕特購書若干種。是書蓋其所得云。公原平野人。考諱綱利。稱五郎兵衛。公幼時屢游鄉校。受書足代立溪。長游東都。奉仕輦轂之下。公既貴顯。然猶且眷々桑梓。方今有此舉。由是鄉人愈益知〔60表〕嚮學。予教授鄉校。豈可不欲拊爵躍以欽慕公之惠愛哉。／

條原弼〔補9〕謹識／

寬政改元己酉九月〔注二〕
另有大學述古一冊。其函蓋有寄藏攝津国住吉郡平野鄉含翠堂。止齋末吉德安宗伴二十二字〔補10〕／
大學述古序／

止齋先生末吉翁〔補11〕。尊信仁齊（齋）〔補12〕東涯二先生。多歷年所。其書莫不讀也。玩索默契。庶如重規而圓矣。唯於大學定本。有未稔然者。每思而有得。所〔補13〕輒筆之。積為一冊。乃名曰大學述古。携示予（余）〔補14〕曰。是我家敝帚已。吾致仕多年。閒居深念。不厭閑寂。唯是娛。則僭踰之恐。秘在篋笥。吾子通家。盍〔60裏〕辨諸。幸無以我一日之長。余曰。有是哉翁之自謙也。乃退奉言受說。大服卓見。語曰。述而不作。信而好古。此孔子自比老彭也。其故何也。蓋聖人〔樂取于人〕〔補15〕以為善。而不敢自用。所以述而不作也。事必稽古。以循往聖遺則。所以信而好古也。述古之編。蓋取諸此。余聞道者天下公共之物也。豈其可私耶。疑而不質。焉得忠。請致於東涯先生。翁乃昌其辭而可之。先生輒讀三四策。徐而曰。嗟乎亦當如此說。未幾先生溘焉易質。翁聞訃慟哭。述古雖黃未充十紙。乃嘆曰。是命也歟。夫先生之沒。举世悼惜。其在翁也。必有所裨。而後乃請其弟蘭氏而遂果。復命序於予而趣焉。翁父〔61表〕執也。鄉先生也。而齡過八旬。余不敢以不文違其命。乃謹書成書之由。以為〔之〕〔補16〕序。寬保辛酉〔補17〕夏五月 節齋士橋宗信〔補18〕撰／

跋／
五福以壽為首。而事以學為基。即壽而學。天下何加焉。止齋翁即（乃）〔補19〕其人也。夙奉我伊藤子之教。有踰鬼神。嘗著大學述古。紬繹十年。鉛槧相隨。今茲甫脫〔補20〕稿。乃寄藏邑庠。曰。豈是珍襲之具乎。求正于同好之士耳。且以予寓于庠中有年于茲。叨荷翁之顧盼〔眄〕〔補21〕也。乃屬之跋。余曰。矍〔補22〕鑠哉翁也。其辭也盡〔畫〕〔補23〕矣。其見也至矣。雖然述古之於定本也。將以為有〔61裏〕事堅白耶。輒翁之志荒矣。抑得魚忘筌。翁其有焉。則其壽也學也。橋宗信書〔補24〕諸序云。寬保歲次壬戌秋八月〔補25〕。勢州之弘道。錄于攝之平野含翠書院。／

數祓講述鈔與書。享保九年高宮玉串內人／度會清在敬書〔補26〕云。享保十乙巳年季冬

十八日書寫之畢〔訖〕〔補27〕。足代弘道。又云。享保十一年正月十一日講。予因知含翠堂之創立在享保十年以前。足代弘道号立溪。來寓校中。居職教授。則平野文教所淵源久矣。／

元々集〔補28〕與書云。右以度會神主益弘本書寫一校畢。于時元禄二己巳歲初春日足代氏弘英。足代弘英之与弘道。或父子。或兄弟。並未詳。蓋与足代〔62表〕弘訓同族。似無可疑。／

續記一冊。卷首有平野含翠堂藏書續記土橋誠齋寄附十五字〔補29〕。誠齋之与節齋。孰父孰子。亦未知其詳〔補30〕。止齋節齋之父執也。誠齋或是節齋之父。而与止齋同時創學之士橋子直乎。東厓撰含翠堂記。文中有土橋子直之名。猶懷德堂之於覺菴。含翠懷德。並成于同志者之手。非一人所創設。而含翠以子直為堂主。懷德以覺菴為堂主。猶今之代表者也。那波魯堂學問源流。以仁齋之古學。為出于續記〔補31〕。而誠齋手写續記。以藏堂中。其崇信可知已。／

注

一：據監居二字知是為長崎奉行。

二：■〔天〕明九年改元寬政

【書き下し文】

去りて平野小学校を訪ひ、含翠堂旧藏書籍を觀る。都て壹百拾餘部なり。蓋し是れ什の一にして、其餘は維新の際に散乱すと云ふ。一函の蓋に文有りて云ふ。

『十三經』一部十六套、永く攝の平野鄉含翠堂に附す。蓋し平野は予の桑梓なり。予幼時屢しば郷校に遊び、學を足代立溪先生に受く。長く東都に遊び、長崎に累官し、監もて居ること一年、任満ちて東都に還るは、實に天明戊辰八年なり。書若干種を購ふ。是の書も亦た其得る所と云ふ。

末吉攝津守藤原利隆

『十三經』一部、末吉藤公の賜ひて以て永く平野鄉含翠堂に附す所為り。是に先んじて公嘗て命を承けて、長崎に襄帷す。長崎は海船の輻湊所なり。公特に書若干種を購ふ。是の書蓋し其の得る所と云ふ。公は原平野の人なり。考諱は綱利、五郎兵衛と稱す。公幼時屢しば郷校に遊び、書を足代立溪に受く。長く東都に遊び、輦轂の下に奉仕す。公既に貴顯たり。然して猶ほ且つ桑梓に眷眷たりて、方今此の挙有り。是に由りて郷人愈益學に嚮ふを知る。予郷校に教授たり。豈に歛拊爵躍して以て公の惠愛を欽慕せざるべけんや。

寬政改元己酉九月 條原弼謹しんで識す

別に『大学述古』一冊有り。其の函蓋に「攝津国住吉郡平野郷含翠堂に寄蔵す。止齋末吉徳安宗伴」の二十二字有り。

『大学述古』序にいふ、

止齋先生末吉翁、仁齋・東涯二先生を尊信すること、多く年所を歴^ふ。其の書説まざる莫きなり。玩索黙契^{もくぎ}し、庶はくは規を重ねて圓するが如くせんと。唯だ『大学定本』に於ては、未だ釈然とせざる者有りて、毎に思ひて得ること有れば、輒^{しか}之を筆す。積みて一冊と爲し、乃ち名づけて『大学述古』と曰ふ。携へて余に示して曰はく、「是れ我が家の敝帚なるのみ。吾れ致仕すること多年、間居して深く念ひて、閑寂を厭はず。唯だ是れ娛しみなれば、則ち僭踰の恐ありて、秘して篋笥^{けいし}に在り。吾子通家なり。盍^や諸を辨ぜざる。幸ひにして我一日の長を以てする無し」と。余曰はく、「是れ有るか翁の自ら謙るや」と。乃ち退きて言を奉じて受読するに、大いに卓見に服す。語に曰はく、「述べて作らず。信じて古を好む」と。此れ孔子自ら老彭に比するなり。其の故は何ぞや。蓋し聖人は人の以て善を爲すを取るを樂しみて敢へて自らは用ひず。述べて作らざる所以なり。事は必ず古を稽へ、以て往聖の遺則に循ふ。信じて古を好む所以なり。『述古』の編は、蓋し諸を此に取る。余聞くに、道は天下の公共の物なり。豈に其れ私すべけんや。疑ひて質さずして、焉ぞ忠を得んと。東涯先生に致すを請ふに、翁乃ち其の辭を昌んにして之を可とす。先生輒^{しか}三四策を讀みて、徐にして曰はく、「嗟乎亦た当に此の説の如くなるべし」と。幾も未^なくして先生溘^も焉^も簞^もを易ふ。翁計を聞きて慟哭^もす。述古の雌黄^し未だ十紙に充たず。乃ち嘆じて曰はく、「是れ命なるか」と。夫れ先生の没するは、世を挙げて悼惜す。其の翁に在るや、必ず埤^ひす所有り。而して後乃ち其の弟・蘭氏に請ひて遂に果たす。復た序を予に命じて趣す。翁は父執なり。郷の先生なり。而して齡八旬を過ぐ。余敢へて以て文せずして其の命に違はず。乃ち謹しんで成書の由を書し、以て之が序と爲す。寛保辛酉夏五月 節齋土橋宗信撰す／

跋／
五福は寿を以て首と爲す。而して事は学を以て基と爲す。乃ち壽にして学なれば、天下何をか焉に加へん。止齋翁は乃ち其の人なり。夙に我が伊藤子の教を奉じ、鬼神を踰ゆること有り。嘗て『大学述古』を著し、紬繹すること十年、鉛槧相ひ随ひ、今茲に甫めて稿を脱す。乃ち邑庠に寄蔵して曰はく、「豈是れ珍襲の具ならんや。正を同好の士に求むるのみ」と。且つ予庠中に寓すること年茲に有るを以て、叨^{たう}に翁の顧眄^{かんべん}を荷るなり。乃ち之が跋を属す。余曰はく、「璽鑑^{しけん}たるかな翁や。其の辭や尽なり。其の見や至なり。然りと雖も『述古』の『定本』に於けるや、將た以爲へらく堅白を事とする有らんや。輒^{しか}翁の志荒なり。抑そも魚を得て筌^{せん}を忘ること、翁其れ焉有^なり。則ち其れ寿なり学なり。橋宗信諸の序を書すと云ふ。寛保歲次壬戌秋八月、勢州の弘道、攝の平野含翠書院に録す。

『教被講述鈔』の奥書に「享保九年高宮玉串内人・度會清在敬しんで書す」云ふ、「享保十乙巳年季冬十八日書写之れ訖る。足代弘道」と。又た云ふ、「享保十一年正月十一日講す」と。予因りて含翠堂の創立享保十年以前に在るを知る。足代弘道、号は立溪、校中に来寓して、教授に居職す。則ち平野の文教、淵源する所久し。

『元と集』の奥書に云ふ、「右度會神主益弘本を以て書写し一校畢はる。時に元禄二己巳歲初春の日足代氏弘英」と。足代弘英之れ弘道と、或は父子なるか、或は兄弟なるか、並び未だ詳らかならず。蓋し足代弘訓と同族なること、疑ふべき無きに似る。『續記』一冊、卷首に「平野含翠堂藏書續記 土橋誠齋寄附す」の十五字有り。誠齋之れ節齋と、孰れか父にして孰れか子なるかも、亦た未だ其の詳らかなるを知らず。止齋は節齋の父執なり。誠齋或は是れ節齋の父にして、止齋と時を同じくして学を創るの土橋子直なるか。東厓「含翠堂記」を撰するに、文中に土橋子直の名有り。猶ほ懷德堂の塾菴に於けるがごとし。含翠・懷德、並び同志者の手に成りて、一人の創設する所に非ずして、含翠は子直を以て堂主と爲し、懷德は塾菴を以て堂主と爲す。猶ほ今の代表者のごときなり。那波魯堂『學問源流』、仁齋の古学を以て續記に出づると爲し、而して誠齋手づから續記を写し、以て堂中に蔵す。其の崇信すること知るべきのみ。

注

一：「監居」の二字に拠り、是れ長崎奉行と爲るを知る。

二：天明九年寛政に改元す。

補注

1：『平野郷町誌』（平野郷公益会、昭和六年「一九三二」）によれば、平野小学校は明治五年（一八七二）五月に学制が布かれた後、同年十一月に第一番小学校として開設され、後に平野小学校と改称された。明治十九年（一八八六）四月に小学校令が公布された後に平野尋常小学校となった。現在、杭全神社に所蔵されている含翠堂旧蔵書には「東成郡町立平野尋常小学校之印」との印記が認められるものが多い。
2：天因が平野小学校で実見した含翠堂野旧蔵書の多くは、現在杭全神社の宝蔵二階に収蔵されている。天因が述べる通り、含翠堂の廃校後、その旧蔵書は平野小学校に所蔵され、その後杭全神社に移された。平野小学校から杭全神社に移された経緯について、杭全神社の藤江寛司禰宜によれば、大正十四年（一九二五）に平野郷町が大阪市に編入された際、平野郷町役場にあった文書類と共に、平野小学校にあった含翠堂旧蔵書が杭全神社に入ったとのことである。現在杭全神社に所蔵されてい

る旧含翠堂蔵書の多くには、含翠堂旧蔵であることを示す「含翠堂図書記」の印記と、平野小学校旧蔵であることを示す「東成郡町立平野尋常小学校之印」の印記と共に、杭全神社所蔵であることを示す「杭全神社蔵書」等の印記がある。なお、杭全神社に現存する含翠堂旧蔵書について筆者等が行った調査の結果については、別稿において述べる予定である。

3…「一函」とあるが、天因が実見した含翠堂旧蔵『十三経』は一つの箱ではなく、二つの箱に収蔵されて杭全神社に現存する。天因が引用する末吉利隆の識語と篠原弼の識語とは、それぞれが別の箱の蓋裏に記されている。拙稿「西村天因と含翠堂」参照。

4…『平野郷町誌』によれば、足代立溪(名は弘道、通称は一学)は元文四年(一七三九)から宝暦十一年(一七六一)三月まで含翠堂において講義を行った。津田秀夫『近世民衆教育運動の展開』(御茶の水書房、一九七八年)は、「元文四年四月より二〇数年間含翠堂教授をしている」と述べる。

5…含翠堂旧蔵『十三経』の箱書きは、「云」を「亦」に作る。誤写と見なし修正する。

6…末吉利隆は、西末吉家の分家・孫左衛門吉康(吉安)の玄孫である末吉孫左衛門嘉子^{よめ}の養子となった善左衛門利隆。利隆は孫左衛門吉康の弟・五郎兵衛道良の子孫で、識語に「平野は予の桑梓なり。予幼時屢しば郷校に遊び、学を足代立溪先生に受く」とある通り平野郷に育ったが、延享元年(一七四四)に嘉子(嘉子)の養子となり江戸に行き、天明七年(一七八七)に長崎奉行となった。寛政六年(一七九四)六月没。平成十一〜十三年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「末吉家資料の目録作成と公開および同家史料の総合的研究」の研究成果報告書「東京大学史料編纂所架蔵写真帳 末吉家資料目録」(二〇〇二年)所収の末吉家系図、出原真哉「研究ノート 長崎奉行御家老部屋日記―『末吉勘四郎長道日記』から」(大阪外国語大学言語社会学会『Ex Oriente』第八号、二〇〇三年)、『寛政重修諸家譜』卷十(続群書類従完成会、一九六五年)参照。「東京大学史料編纂所架蔵写真帳 末吉家資料目録」については、神戸大学大学院人文学研究科特命助教の松本充弘氏と平野歴史民俗研究会の南田潤氏に御教示いただいた。特に記して感謝申し上げる。

7…含翠堂旧蔵『十三経』の箱書きは、「以」字の下に「永」字がある。脱字と見なし補う。

8…含翠堂旧蔵『十三経』の箱書きは、「輻輳」の下に「公」字がある。脱字と見なし補う。

9…『平野郷町誌』によれば、篠原弼(号は盤谷、良斎)は、寛政二年(一七九〇)から文化四年(一八〇七)まで含翠堂において講義を行った。津田秀夫『近世民衆教育運動の展開』は、「宝暦一二年より文化四〜五(一八〇七〜八)年頃までの含翠堂教授である」とする。

10…天因が実見した『大学述古』(抄本、一冊)は杭全神社に現存する(以下、含翠堂本)。但し、天因の述べる『大学述古』を収蔵した箱は所在不明で、引用されている識語二十二字については確認できていない。天因の旧蔵書である懷徳堂文庫・碩園記念文庫・小天地閣叢書には、含翠堂旧蔵の『大学述古』に基づく写本がある(以下、碩園文庫本)。その写本においては、「含翠堂図書記」の印記が筆写されている。11…天因が実見した函書に記されていたように、『大学述古』が「止斎末吉徳安宗伴」が著して、自ら含翠堂に寄贈したものであるならば、止斎は末吉藤右衛門宗伴。「東京大学史料編纂所架蔵写真帳 末吉家資料目録」所収の末吉家系図によれば、宗伴は東末吉家の末吉治兵衛宗久の子で、東末吉家を継いだ末吉太郎兵衛宗増の弟。宗伴の幼名は藤一郎また猪之助で、末吉藤右衛門増長の孫・末吉藤右衛門益長の養子となった。延享元年(一七四四)八月に八十六歳で死去した。後述する寛保元年(一七四二)に記された末吉宗信の『大学述古』の序文に、元文元年(一七三六)に伊藤東涯が死去したとの知らせに接して宗伴が慟哭したとあり、また「齡過八旬」とある。こうした記述と宗伴の年齢とは矛盾しない。

12…「仁斉」とあるのは伊藤仁斎のこと。

13…含翠堂本・碩園文庫本には「所」字はない。衍字と見なし削除する。

14…含翠堂本・碩園文庫本は、「予」を「余」に作る。誤写と見なし修正する。

15…含翠堂本・碩園文庫本は「聖人」の下に「以為之序」がある。脱文と見なし補う。

16…含翠堂本・碩園文庫本は「為」の下に「之」字がある。脱字と見なし補う。

17…「寛保辛酉」の年は寛保元年(一七四一)である。

18…土橋宗信は土橋家の分家の子孫。森繁夫『含翠堂考』(大阪青年塾堂、一九四二年)の附録の系図第二表によれば、友直の四代前の正次の後、直系の貞俊と分家の秀俊とに分かれ、宗信は秀俊の曾孫にあたり、通称は九郎二(次)郎、法名が良慶・節斎、宝暦二年死去。

19…含翠堂本・碩園文庫本は「即」を「乃」に作る。誤字と見なし修正する。

20…含翠堂本・碩園文庫本は「脱」を「税」に作るが、意味が通じない。天因は引用に際して意味が通じるように修正したと見られ、ここでは天因の修正に従う。

21…含翠堂本・碩園文庫本は「昉」を「昉」に作る。誤字と見なし修正する。

22…含翠堂本・碩園文庫本は「嬰」を「嬰」に作るが、意味が通じない。天因は引用に際して意味が通じるように修正したと見られ、ここでは天因の修正に従う。

23…含翠堂本・碩園文庫本は「盡」を「畫」に作るが、意味が通じない。天因は引用に際して意味が通じるように修正したと見られ、ここでは天因の修正に従う。

24…含翠堂本・碩園文庫本は「書」を「憲」に作る。天因は引用に際して修正したと見られ、ここでは天因の修正に従う。

25…「寛保歳時壬戌」の年は寛保二年(一七四二)である。

26：天因が実見した含翠堂旧蔵の『数祓講述鈔』（抄本、一冊）は杭全神社に現存する。『数祓講述鈔』は伊勢山田の神道学者・喜早（度会）清在が著した書で、佐古一冽「喜早清在の研究（上）」（『神道史研究』第十六卷第一号、一九六八年）・「喜早清在の研究（下）」（『神道史研究』第十六卷第二号、一九六八年）によれば、清在は天和二年（一六八二）二月に伊勢山田郷に外宮宮掌大内人職を代々務める喜早家に生まれ、享保元年（一七一六）七月に外宮別宮・高宮玉串大内人職に任ぜられ、度会姓を名乗ることが許された。「近世伊勢神道の中にあつて、清在は思想的には出口延佳・黒瀬益弘等の後を受け継ぎ、さらに当時の垂加神道を含めた儒教的なるものに影響されつゝ、自己の神道説を形成してゆかうとする構えを見せた」人物で、大坂・京都・江戸など各地に出かけて神道関係文献や『日本書紀』、『論語』・『孝経』・『孟子』などの儒家の文献について講じており、また伊藤東涯とは詩歌の贈答も交わしている。なお、天因が割注で記している「享保九年高宮玉串内人度會清在敬書」の部分には、奥書ではなく、序の末尾の部分からの引用である。なお、序の末尾の部分には「享保九年」に続いて「甲辰年陽月廿九日」とある。

27：含翠堂旧蔵の『数祓講述鈔』は、「畢」を「訖」に作る。誤写と見なし修正する。
28：『元元集』は北畠親房の編著とされる神道書で、天因が実見した含翠堂旧蔵の『元元集』（抄本、一冊）は、杭全神社に現存する。

29：『横記』は明の呉廷翰の著で、天因の実見した含翠堂旧蔵の『横記』（抄本、一冊）は、現在大阪大学附属図書館・石瀆文庫に収蔵されている。その見返し裏には、天因の引用する「平整含翠堂藏書横記／土橋誠齋寄附」の十五字が記されており、また第一葉表には「含翠堂圖書記」・「石瀆文庫」の印記がある。大阪大学附属図書館の懷德堂文庫・碩園記念文庫にも『横記』が収蔵されているが、これは石瀆文庫のものを写した写本と考えられる。碩園記念文庫の写本には「含翠堂圖書記」の印記が手写されているが、土橋誠齋の識語や「石瀆文庫」の印記はない。なお、石瀆文庫の『横記』の本文第一葉表右上には印記があるが、印面の文字が読めないように朱で塗りつぶされている。この印記は杭全神社に現存する含翠堂旧蔵書の多くに認められる「東成郡町立平野尋常小学校之印」の印記と見られる。すなわち、両者は印面の匡廓の大きさが縦横いずれも約五六センチで同じであり、石瀆文庫の印記を子細に見ると、「立」・「常」・「小」・「學」・「印」の各字の一部が確認でき、それらは「東成郡町立平野尋常小学校之印」の印記と合致している。石瀆文庫の『横記』には「杭全神社藏書」の印記がないことから、天因が平野小学校で実見した後、杭全神社には所蔵されずに流出したと推測されるが、詳しい経緯は不明である。なお、碩園記念文庫に所蔵されている、天因が平野小学校で実見した『横記』と『大学述古』との写本について、『大学述古』の写本は小天地閣叢書に含まれているが、『横記』の写本は小天地閣叢書には含まれていない。また二つの写本は表紙等の装丁が

異なる。このため、二つの写本は同時に作成されたものではないと推測される。

30：誠齋は土橋友直の号。森繁夫『含翠堂考』には、友直について「又名保家、平八郎・四郎兵衛後七郎兵衛、号誠齋又好古堂。三宅孫左衛門友政の男、言成の嗣となる。三宅茂兵衛令直女を娶る」とある。なお、天因は誠齋（土橋友直）と節齋（土橋宗信）とを父子ではないかと考えているが、そうではない。補注18参照。

31：那波魯堂『学問源流』に、「仁齋父子ノ学ハ、明ノ呉廷翰ノ見識ニ本ヅキ、却テ呉廷翰ノ学ヲ人ニハ不説、呉廷翰薨記アリ、横記アリ、随筆ナリ、思出タルコト、読得タルコトヲ、時時書シルシ、薨ニ盛集タルガ薨記、横ニ盛集メタルカ横記ナリト云意ノ標題ナリ、其自序ニ見ヘタリ、丹沿録、宛委餘編ノ富博ニモ非ズ、却テ更ニ吉斎漫録上下ノ巻アリ、全篇経義語録ニ就テ、識見ヲ発明ス、仁斎東涯ノ学ノ淵源ナリ」とあることを指す。『吉斎漫録』も呉廷翰の撰。なお、『丹沿録』は明の楊慎、『宛委餘編』は明の王世貞の撰。

③平野の七名家

【62表】平野有七名家【補1】。曰土橋。曰末吉。曰三上。三氏本支七家是也。／

【書き下し文】

平野に七名家有り。曰はく土橋、曰はく末吉、曰はく三上、三氏の本支七家は是なり。

補注

1：七名家とは、坂上田村麻呂の子・広野麻呂の子孫とされる、末吉・土橋・辻葩・井上・成安・西村・三上の七氏を指す。

④光源寺訪問・神光寺について

【62裏】遂游光源寺。寺有篠原盤谷墓。墓石唯刻盤谷武村弼府君墓八字。碑陰刻文化六己巳年三月二十十字而已。其側有妙空武村氏墓。附刻姪篠原弼建五字。可知盤谷本姓為篠原母家為武村氏。或有故初日月武村氏歟【補1】。武村氏以寛政元年己酉七月十一日卒行年六十七抑又本姓武村氏。寛政以後出嗣篠原氏歟。想盤谷本地人。但無可徵師承閱歷之詳者。可憾之至。／

問土橋末吉諸老之墓。在服部川神光寺【補2】。／

【書き下し文】

遂に光源寺に遊ぶ。寺に篠原盤谷の墓有り。墓石唯だ「盤谷武村弼府君の墓」の八字を刻み、碑陰に「文化六己巳年三月二日」の十字を刻むのみ。其の側に妙空武村氏の墓有り。附して「姪篠原弼建つ」の五字を刻む。盤谷の本姓「篠原」為りて母家武村氏を知るべし。或いは故有りて初めの日月武村氏なるか。武村氏寛政元年己酉七月十一日を以て卒す。行年六十七抑そも又た本姓武村氏にして、寛政以後出でて篠原氏を嗣ぐか。想ふに盤谷は本地人ならん。但し師承の閥歴の詳なるを徴すべき者無し。憾みの至なるべし。

土橋・末吉諸老の墓を問ふに、服部川神光寺に在り。

補注

1…津田秀夫『近世民衆教育運動の展開』は、「篠原正旦は別名を武村格」といい、諱を弼または惟明、通称を頼母、号を盤谷、別号を良斎という。宝暦十二年より文化四（一八〇七）年頃までの含翠堂教授である。宝暦十二年一〇月には彼は師足代一学の墓碑を作っている。寛政一二（一八〇〇）年から文化三年までのあいだ、毎年含翠堂新賑窮料の募集に応じ、銀二〇目ずつを寄附している。もともと、文化四年には、篠原敬中にこの基金から六〇〇目を貸付けている。正旦と敬中との関係は分らないが、この時期にすでに正旦は含翠堂教授をやめているのである」と述べる。

2…神光寺にある土橋家の墓については、梅溪昇『大坂学問史の周辺』（思文閣出版、一九九一年）所収の「含翠堂・懷徳堂ゆかりの神光寺について」参照。なお、末吉家の墓は神光寺にはなく、平野郷の光源寺、及び杭全神社に隣接した墓地、並びに高野山にあるとのことである。末吉家の墓地については、平野歴史民俗研究会代表世話役の藤岡璋光氏が末吉家の御当主・勘四郎氏に御確認くださり、同研究会の南田潤氏を介して伺った。特に記して感謝申し上げる。

⑤調査記録執筆後の識語

【62裏】右三日午后自平野帰阪記於編輯局／

【書き下し文】

右三日午后、平野より帰阪して、編輯局に記す。

⑥天囚の所見

【62裏】懷徳含翠。孰先孰後。予按。盤菴与五同志。創設私学曰懷徳堂。在享保九年之災後。其得官准。則享保十一年也。平野古老有及仁斎之門者。足代立溪曰。寓于庠【63表】中有年。其手写数載講述鈔。在享保十年。而十一年講畢。想其始居平野。当在十一年以前。則平野諸老之講学也久矣。東厓（涯）〔補1〕以享保十四年撰含翠堂記。其名曰含翠者。或在此年。而邑庠非創立于此時。初平野有庠而無名。會享保九年災。石菴避火此地。其門人觀平野有学。而奮勵一番。有創学之舉。亦未可知焉。大阪創学。未幾成于官許。懷徳堂之名。始聞于世。而平野諸老。亦請東厓厓（涯）〔補2〕。命名邑庠。曰含章（翠）堂〔補3〕。亦或為情理宜有之事。今姑記憶測。以待後考。彦又識／

【書き下し文】

懷徳・含翠、孰れか先にして孰れか後なるか。予按するに、盤菴と五同志と私学を創設して懷徳堂と曰ふは、享保九年の災後に在り。其の官の准すを得るは、則ち享保十一年なり。平野の古老に仁斎の門に及ぶ者有り。足代立溪曰はく、「庠中に寓すること年有り」と。其の『数載講述鈔』を手写するは、享保十年に在りて、十一年に講畢る。其の始めて平野に居るを想はば、当に十一年以前に在るべし。則ち平野の諸老の講学するや久し。東涯享保十四年を以て「含翠堂記」を撰す。其の名づけて「含翠」と曰ふ者、或いは此の年に在りて、邑庠此の時に創立せらるるに非ず。初め平野に庠有るも名無し。会たま享保九年に災ありて、石菴火を此の地に避く。其の門人平野に学有るを觀て、奮勵一番、創学の舉有るも、亦た未だ知るべからず。大阪に創学し、幾くも未くして官許と成り、懷徳堂の名、始めて世に聞こゆ。而して平野諸老も亦た東涯に請ひ、邑庠に命名して、「含翠堂」と曰ふも、亦た或いは情理の宜しく有るべきの事と為す。今姑く憶測を記して、以て後考を待つ。彦又識す。

補注

- 1…「東厓」とあるのは伊藤東涯のこと。
- 2…「東厓」とあるのは伊藤東涯のこと。
- 3…「含章堂」とあるのは含翠堂のこと。

⑦『摂津名所図会』からの引用

【63表】攝津名所圖繪云含翠堂平野郷中にあり今はむかし八十年許以前享保の初つか

た此郷に土橋七郎兵衛友直といふ人あり若年より京師に游歴し經史を学ふ事三年の後故【63裏】郷に歸り井上左兵衛正臣か居室を割いて講堂とし庭中に古松あれば含翠堂と号し傳りぬ月並三五七十を以て講習の日とし浪華の萬年先生東武の執斎先生京師の東涯先生等を此堂に迎へて講習怠らず遂に先の領主本多侯の聴に達し褒賞したまふ又友直曰此郷は近隣の小邑に同しからず農工商相交りて荒年には飢渴に逮ふ者もありいさ其寸志を戮せて今より其備をしてんとて享保四年亥十月多少を論せず財を投けて賑救料と号し年歳を累て米錢若干となりきこゝに享保十七年の秋西国【補1】の国と蝗の災ありとて米價貴く窮民多かりければ米穀二百石を以て飢寒を救ふ此後もかゝる事もやあらんとて友直塵を振て深志の歳十三四人【64表】を聚め財を投しこれを貸殖しければ十有餘年の後數百金に為りぬ又厥后米價高く飢餓に及ふへき窮民を救ふ事近年天明七年まで兩三度にも及へり今に至て相續しかはらぬ松の色とこしなへに朽ちすして聖教を学ひ呉竹の世々に傳ふへきよしを節齋土橋宗信あるは執斎三輪希賢等こまゝ此事を記しけるを傳聞てこゝに著はし侍る云々（含翠堂記文享保壬子歲仲冬とあり）於含翠堂東涯先生關講筵の圖あり／

【書き下し文】

攝津名所圖繪に云ふ、（以下、和文の部分は省略）

補注

1…「西国」の「国」は衍字。